

老いたる素戔鳴尊

芥川龍之介

高志（こし）の大蛇（をろち）を退治した素戔鳴（すさのを）は、櫛名田姫（くしなだひめ）を娶（めと）ると同時に、足名椎（あしなつち）が治めてゐた部落の長（をさ）となる事になつた。

足名椎は彼等夫婦の為に、出雲（いづも）の須賀へ八広殿（やひろどの）を建てた。宮は千木（ちぎ）が天雲（あまぐも）に隠れる程大きな建築であつた。

彼は新しい妻と共に、静な朝夕を送り始めた。風の声も浪の

水沫（しぶき）も、或は夜空の星の光も今は再（ふたたび）彼を誘つて、広漠とした太古の天地に、さまよはせる事は出来なくなつた。既に父とならうとしてゐた彼は、この宮の太い棟木（むなぎ）の下に、赤と白とに狩の図を描いた、彼の部屋の四壁の内に、高天原（たかまがはら）の国が与へなかつた炉辺の幸福を見出したのであつた。

彼等は一しよに食事をしたり、未来の計画を話し合つたりした。時々宮のまはりにある、柏の林に歩みを運んで、その小さな花房の地に落ちたのを踏みながら、夢のやうな小鳥の啼く声に、耳を傾ける事もあつた。彼は妻に優しかつた。声にも、身ぶりにも、眼の中にも、昔のやうな荒々しさは、二度と影さ

えも現さなかつた。

しかし稀に夢の中では、暗黒（くらやみ）に蠢（うごめ）く怪物や、見えない手の揮（ふる）ふ剣（つるぎ）の光が、もう一度彼を殺伐な争鬪の心につれて行つた。が、何時も眼がさめると、彼はすぐ妻の事や部落の事を思ひ出す程、綺麗にその夢を忘れてゐた。

間もなく彼等は父母になつた。彼はその生れた男の子に、八島士奴美（やしまじぬみ）と云ふ名を与へた。八島士奴美は彼よりも、女親の櫛名田姫に似た、氣立ての美しい男であつた。